

鉛筆 × 消しゴム × シャープペンシル

(15禁・百合)

鉛筆って馬鹿みたい。だってイマドキ時代遅れじゃない？
ほとんどが木で出来てて、書くために必要な黒鉛の部分な
んで真ん中のちよつとしたところしかない。無駄ばつかで田
舎モンで、ホントに洗練されてないって感じ。

それなのに、あたしはいつもコイツと一緒の筆箱にいるの。
ご主人がだらしなくて全部一緒くたに入れちゃうからこいつ
の先っぽがつんつん、あたしの白い肌に黒い痕を残して、そ
れを繰り返すうちになんか薄汚れてしまっただわ。

今はまだ厚紙で作られたケースに入ってるからほとんどど
のところが真っ白だけれど、そのうちに小さくなって丸まって
薄汚れた灰色になってしまっただわ。嗚呼、悲しき一生。そ
れもこれも全部コイツ、鉛筆のせいだ。

「バツカじゃないの、なんでアンタこつち来るのよッ！ も
つと端っこ行きなさいよっ！」

「ご、ごめんねっ、消しゴムちゃん、ごめんねっ！」
コイツはその度に申し訳なさそうに謝るんだけど、そんな
んじや付いた痕は消えなくて、あたしはその度いらいらする
の。

コイツが汚したノートも、机の上のラクガキも消すのは全
部あたしの役目。身を削って削って働くのが全部コイツの後
始末だっと思うとなんだか自分が消しゴムとして生まれた悲
劇を嘆きたくなってしまうわ。

同じプラスチックなら下敷きとかメガネケースとかに生ま
れればよかったっと思う。少なくとも誰かさんのせいで小さ
くなったり削られたりすり減ったり汚されたりすることはな
いもの。

そんなこんなで今日も学校に着く。

一時間目は算数。計算間違い大発生。大慌てで直していく。

「ホントやってらんないわ、やんなつちやう」

あたしが毒づきながらごしごしノートを擦るたびに鉛筆の
奴はしよぼくれてしまう。丸まった筆先を申し訳なさそうに
光らせて机の隅っこに今にも落ちそうに転がっていく。

そんなコイツのことが、我慢ならない。

「ああもう、しょうがない奴っ！」

ドンくさくて、野暮ったくて、ほとんど無駄ばつかで。削
られて尖っても、すぐにすり減って丸くなるヘタレの癖に。

あたしはコイツのことが気になって気になってしょうがな
いんだ。

そんなんだから、コイツのこと見放せないんだ。

がたがた揺れる下校の合間も、コイツはずつと謝ってる。

「筆箱の中、狭くてごめんねっ！ がたがた揺れてごめん
っ！」

細長くて今にも折れそうな身体をどうにか支え棒みたいに

して、頑張ってるけど、乱暴な小学生の運搬じゃかなうわけない。たちまち崩れて筆箱の中はぐっしやぐしやだ。

全部全部自分のせいみたいなのに、鉛筆は言う。それが気に入らなくてあたしはいつも罵ってしまふ。そんなつもりは無いのに。

「アンタのせいじゃないでしょうが！　なんで謝るのよ」
「だって、だって、わたしが触ったら消しゴムちゃん、汚れちゃうから」

そう言つて頑張つて芯の先を無理矢理筆箱の角に押し込めようとする。

「そんなことしたら、折れるわよ。せっかくさつき削つてもらったばかりなのに」

「いつ、いいのっ……消しゴムちゃんが汚れるよりいいから」
みしみし先つぼが悲鳴を上げているのが分かる。

「止めなさいよ。使われなくなったら捨てられちゃうのよ」

あたしはそう言つて、無理矢理コイツをはじき飛ばしてやる。すつぽ抜けて、その鉛筆の先があたしの身体に触れる。

一瞬だけ熱い。ゴムと炭素との摩擦熱が身を少しだけ灼く。その熱さがほんの僅か、気持ちよかつたりもする。汚れてしまふことは不快だけれど、まるで生きているみたいに、彼女の熱を感じることは心地よい。生まれた時、たくさんの高分子のプールの中から固められた時のことを思い出すのかもしれない。

れない。

「あう、ごめん、ごめんよう……」

「いいから、黙るっ！　もうじき学校着くよ」

びしやりとそう言つてやると、鉛筆はぶつくとさ言いながらも謝るのを止める。

それであたしは満足する。今日もコイツの芯を守つてやった。

全ての鉛筆の芯の長さは有限。

全ての消しゴムの大きさは有限。

つまりあたしたちには寿命がある。ちゃんと最後まで使つてもらえるまで、長生きしなくちゃいけないのだ。

鉛筆は夜中になると騒ぎ出す。宿題を終わらせてくれたにすり減つた芯を丁寧に削られている間、今日一日のことを思い出して、泣きそうになつて、戻ってくる頃には疲れ果て神経質に尖っている。

「だって、だってっつ！」

今にも折れてしまいそうなほど、身をきませる。そのたわごとの殆どが、途方もない嫉妬だ。

その日の間にあたしが触れた者達に対してのやきもち。

今日の対象はノートみたいだった。

「だって、おんなじ白だし、いつも消しゴムちゃんの方から

すりすりしていくし……一緒にいるのつらいよう」

「馬ッ鹿じゃないの、アンタ」

あたしは思いつきり笑ってやる。

そんなこと、絶対無いのに。ホント馬鹿だわ、コイツ。

「あなたの方こそ自分からノートに鼻先すりすりしてるじゃないの。先っぽ突っ込んで真っ黒いの擦り付けてずいぶん楽しそうに見えるけど」

「やつ、だって、それは……命令されて」

「そのわりにはよく書き損じしてるじゃない。そうすればノートと出来るだけ長く触れられるもんね」

「やう、ちっ、違うよう……」

もじもじと黒鉛の層を伸び縮みさせて、ちゃんと答えられない。それを語るのはちよつと快感だったりする。

「なによ、ちゃんと答えなさいよ。そうじゃないとアンタのことなんか知らないんだから」

「だっ、だって、書き間違ったらわたしの欠片が消しゴムちやんに届くから……ちよつとでも触れたらって思っつて」

そこまですぐいいかけて、鉛筆は黙る。堪えきれない感情のたかぶりに、きゆううと音を立てそうなくらいに木の軸が大気中の水分を吸い込む。セルロースの組織がいまにもねじくれてしまいそうだ。

まったく放っておけなくて、笑い飛ばしてやろうと言葉を

紡ぐ。

「だいたいノートはねっ、図体でかいから筆箱と一緒に入らないのよっ！ あんたとは違ってね！」

そこまで言っつて、ついしゃべりすぎたことに気がつく。

鉛筆が一瞬何か言いたげにかたんと音を立てて、それでも何も言わなかった。次の一言を待たれている気配を感じて、あたしはいよいよ覚悟を決めた。

ねじれずに、ひねくれずに。

真四角の、真っ白の、ホントの言葉を吐く。

「いつでも一緒にいたいと思うのはアンタだけなんだから。」

そんな馬鹿な嫉妬なんてしないで」

アンタがどれだけちびて、書きにくくて今にも捨てられそうになっても。

わたしが古びてしわしわに経年劣化してゴム割れしてしまつても。

ずっとずっと一緒にいようね、つて。

そんなことを思っていたんだ。

ある日の朝、鉛筆はいなかった。代わりに知らないアルミの棒きれが入っていた。

その冷たさが不快で思わずしわを寄せた。

「誰よあんた」

「私の名はステッドラ。お前の新しいパートナーだ」

聴いたことがあった。ご主人が新しいシャープペンシルが欲しいのだと言っていたのを今更のように思い出す。

「ぼつかみたい。あたしの鉛筆を返してよ！」

「あいつはお前のものではない。ご主人のものだ」

心ないその言葉にあたしは小さく身を震わせる。

文房具は奴隷。どうしようもないハナタレ小僧であっても持ち主の要請に合わせて筆箱の構成は組み替えられる。

どうやら、いけ好かないあの小僧、誕生日だかクリスマスだけに前から憧れていた高級シャープペンシルを手に入れたらしい。

ステッドラは小さく身じろぎしてつぶやいた。

「これから一緒に暮らすんだ。少しは仲良くしてくれても良いんじゃないか」

「……あんたと、」

死んでも嫌だつて言い放ちたかった。あたしはずっとずつと鉛筆と添い遂げるんだつて心に誓っていたんだつて言いたくなかった。

でもそれをぐつとこらえる。

高分子構造の鎖の奥に本当の気持ちを隠して、あたしは思い切り膚に皺を寄せて笑った。

「よろしくね、ステッドラ」

「ああ、よろしく」

うんざりするほどにお互いに理解しきっていた。望むと望むまいと、あたしたちはパートナーにならなくちゃいけない。それが生まれ持った宿命。消しゴムは書かれた物を消すための存在。黒鉛で筆記する存在が居なければ、存在価値がないのだ。

それからの日々を寒々しく感じた。あたしはただ仕事をこなすだけこなした。

ステッドラの書いた痕はなかなか消えなくて、あたしは身体を縮ませて出来るだけ硬質になろうとつとめた。砂消しゴムになってしまいそうならいにくく硬く身を強張らせて、できるだけすり減らないように頑なに仕事を片付ける。

ノートに触れて字を消していることに、自分のしていることが嫌になって仕方がなかった。けれど冷たいステッドラに理解されるわけがないのだと思って、愚痴を吐くことすらしなかった。

そうしなくちゃいけないんだつて、思い込んでいた。

「……無理をしていないか？」

ある晩、ステッドラの方から聞いてきた。

ぎくりとして聞き返す。

「どうして？」

「私の筆跡はノートに食い込む。お前に負担をかけていないか心配だったんだ」

ステッドラはやりきれない、といった様子で小さく口金を引き締めた。

「どうやらご主人は柔らかい芯を使うのが嫌いらしい。先日、文房具屋で2Hの芯について尋ねていた」

「2Hですって！ 小学生が使いこなせる硬さじゃないわ」

「まったくだ。そもそも私は製図用なんだ。漢字ドリルを書く為に生まれてきたんじゃない。何を考えているのやら」

ステッドラの言い方はご主人を貶めるようなものだったけれど、あたしはそれを咎める気にはなれなかった。まったく同感だった。

「ねえ、お願いがあるの」

あたしは思いついたことを口に出してみることにした。

ずっとずっと、考えていたことだ。鉛筆と別れてすぐに思いついて、それからどうやって実行に移すか考えあぐねていた。

コイツのことが信用できるかどうか。いちかばちかに賭けてみたくなった。

「あたしを二つに切り裂いて欲しい」

ただ正直に、自分の希望を述べた。

ステッドラはぎよっとした様子でアルミの金属光沢を鋭利

にした。

「自分で何を言っているのか理解しているのか」

「馬鹿ね、そんなに死んだりしないのよ、消しゴムってのは」

ステッドラの心配を笑い飛ばしてやる。

「あの子は、生温かったわ。木で出来ているから」

弱くて、すぐ丸まって、ヘタレで。優しくて柔らかくて、どこかもどかしい。そういうところが好きだった。

「あんたなら、冷たいでしょうよ、アルミ製の人工物。機械の冷たさで、このあたしを切り裂いてくれればいい」

その硬いペン先で、柔らかなゴムを切り裂いて欲しい。痛くても構わない。切り口が無様だって構わない。いっそのこと、ひどくしてほしいぐらい。

小さくなれば寿命が縮む。それは知っている。それでもどうしてもやらなければいけないことがあった。

小さくなれば、あたしは筆箱の隙間から外へ出られるかもしれない。

ころころと転がって外の世界に飛び出たしまえば全ての古びた文房具が行き着く場所に行くことが出来るかもしれない。そこでいつか鉛筆が来てくれるのを先に待つ。

「お前はそれで、痛くはないのか」

口金のねじをかすかに震わせて、ステッドラは言った。

「いいのよ。ちよつとぐらい痛くたって」

あの子の為だから、と言いかけてそうじゃないことに気づく。

ただ会いたいだけ。あの子のことが好きな自分のためなら、どんなことでも出来るってことなんだと思った。

あたしは紙ケースの中でそつと身じろぎする。硬質な厚紙がいつもよりもずっと他人行儀のように感じる。真つ白く粉を吹いた表面を少しだけよじらせて、あたしはせがむ。

「してよ、お願いだから」

甘えるようにして、硬く鋭いものが早く自分の中へ入ってくるように、誘う。

柔肌の高分子鎖の内側へ熱い黒鉛と冷たい金属とが分け入つて、みじみじと真新しい処女雪の如き白を汚していくのを想像して、あたしは少しだけぼうつとした。意識を自分の奥の奥へ潜めて、運命が降ってくるのを待つ。

それでも待ちきれなくて、じわじわとケースを脱ぎかける。それを止めるようにして、彼女の声がする。

「……あなたには負けたよ」

ステッドラはだらりと口金を緩めた。ぴくりとも動く気配はなかった。

「いいさ。これは報いだ」

「報い？」

聞き返したところで、小さな声が聞こえてきた。

「うにゅ？ どしたの、さっちゃん」

「いいんだ、ミニケシ。何でもないよ」

ステッドラは慌ててそう言うところ、照れ隠しのようには転がった。それでも言い訳がましく、言葉を付け足す。珍しく慌てているみたいだった。

「いやえーと、さっちゃん、つてのは『先つぽ』のさっちゃん、なんだが。ミニケシの奴、軸が共有だと思つて人のことを馴れ馴れしく呼ぶんだ。こつちはシャープペンシルであつちほ消しゴムなのにな」

「……あなたには、もう他の消しゴムがいるの？」

「ああ、同じ軸を分けた姉妹だよ。真つ白でチビで、愛しい妹さ」

諦めきつたように、彼女は胴軸のアルミを光らせた。

「あの子を汚したくないから、お前を利用していた。悪かつた」

かちりと彼女は芯を飛び出させた。それはまだHBだった。不器用な硬さと優しすぎる黒さとを兼ね備えて、書く為だけに生まれてそして消費されていくだけのもの。高潔にして純粹な焼成された粘土と黒鉛。

「お前は二つに分かれなくて良い。そのままのお前がいい」
彼女はそう宣言した。

「主人へはどうにか私の方からアプローチしてみよう。鉛筆が筆箱へ戻れるようにな」

そして言う通りになった。

彼女はわざとその芯先を詰まらせた。小学生の主人はもちろんそれをすぐに分解した。そして案の定部品を無くした。

主人は泣いた。けれどどれだけ泣いたって、部品が出てくる訳もない。すぐにステッドラはペン立てへ戻された。

まるで絵に描いたような喜劇。その中心にいるステッドラはひどく幸せそうだった。使われない文房具は、きつと捨てられるのだから、彼女はひどく満ち足りた様子できらりきらりとギザギザのローレット加工を光らせていた。

「口金だけでも販売はしているんだがな。主人は知りもしないだろう」

小さくステッドラは笑った。ぼっかりと空いた先端部の穴は塞ぎようもなかった。

「私は製図をするために生まれたのさ。彼が成長するまで、姉妹そろってここで見守ることにしよう」

最後に呟いた彼女の独り言は、聞こえないふりをした。

「機械が心を持たないなんて幻想なのにな。お前には私がお前を突き刺して分けてしまうような冷たい人間に見えたんだな」

その声が寂しそうだったのも、無視した。だって、あたしはあの子を選んだのだから。

ステッドラことは嫌いじゃなかった。あたしのことを大切にはしてくれたし、冷たい体躯の中に繊細な魂を感じたりもした。

けれど、一度に二つのものを愛することはしたくなかった。寿命が半分になってしまいうから。身体が半分になればそれだけすり減って無くなるまでも長くなる。

どうせなら、本当に愛したものと、長く長く添い遂げたかった。

その日の夜。人間たちは皆寝静まっていた。

筆箱の奥底の方で、鉛筆は震えていた。

「よ、汚しちゃう、汚しちゃうよお……」

その細い木の身体をますます細らせて、悲しそうに身を隠していた。久しぶりに削られて神経を尖らせてびくびくしている。

「わたしが一緒にいたら、あなたのこと、汚しちゃう。突き刺して、傷つけちゃうから。わたしなんて、役立たずだし、田舎モンだし……」

ぐちぐち言ってる鉛筆を見ると、こっちまでいらいらしてくる。

「そういうの止めてよ」

あたしは思わず彼女の愚痴を遮った。

「あんたになら、あたしは何されたっていいの。あんたのこ
と好きなんだから。あたしの好きな人のこと、そんな風に言
わないで」

ぴしりと何か亀裂が入ったみたいいな音がした。それからし
ゆうしゆうと何か湯気でも上がりそうな音。

鉛筆がごろごろ転がっている。その回転の摩擦熱で筆箱の
中が煙を上げそうになっている。

「ちよ、ちよっと何なのよアンタ！ みんな可燃物なんだか
ら！ 捨てられる時は一緒に燃えろに燃えるゴミ扱いなんだから
ね！ やめなさいよ！」

「あう、ううう、ご、ごめん……」

ようやく鉛筆は動きを止めた。ちよっとだけ芯の先が丸ま
ってしまっている。

「あーあ、せつかく削ってもらったのに」

しよんぼりとしている。

「いいじゃない。どうせ今日はすぐ丸まっちゃうんだから」

「え」

「言わせる気？ 久々に会ったのに」

ちよっとだけ拗ねてしまいたくなる。

「……いいよ、さわって」

鉛筆はそう言っただけ身を強張らせている。ぎゅっと黒鉛の層
を硬く詰めてされるのを待ち構えている。

「馬鹿ね」

「え」

ぽかんと繊維質を緩めて、それからまた突然火でも付いた
ようにごろごろ筆箱の中を転がり始める。

「だ、だって、やり方とかあんまりよく分かんないしつ、わ
たし、わたしの方から消しゴムちゃんを汚しちゃうなんてつ、
そんなのっ」

「ああもう、いいわ。いいから止まって」

言うなり、あたしは彼女の軸にそつと触れた。

「つ、やわら、かい……」

鉛筆がそう言っただけ、だらりと芯の黒鉛を緩めさせるのが分
かる。とろけそうにその木の内側の層を広げて、その柔らか
さを味わおうとしているのが分かる。

あたしも彼女の温もりを感じる。木の確かな呼吸を感じる。

それでもケースの剥がされている先端でしか、その感触が
得られないのは口惜しかった。厚紙が邪魔で、ひどくもどか
しい。

「ねえ」

つん、と鉛筆の先をつつく。全部は言わせないで欲しいな、
なんて、ちよっと生娘みたいなことを思っただけで、ちよ

つと恥ずかしくなる。

でも、どうやら気づいてくれたみたいだった。鉛筆は少しだけでもじもと粘土の粒界表面をうごめかせたけれど、やがて意を決したように分子運動を静かにさせた。

「あ、う……っ、ぬ、脱がす、よ」

「んっ……」

いちいちそうやって宣言されるのは恥ずかしかった。けれど、そういう優しいところが嫌いになれない。

削っていない方の先端で不器用にぐいぐいと押されていく。強引で無粋だけれど、仕方ないなと思って、許してしまふ。なんだか弱みでも握られているみたいだ。

ま、惚れた方の負けってことかもしれないわ。

すぼつとケースが外れる。鉛筆が驚いたように、芯を震えさせる。

「すごい、きれいな」

「……なによ」

そんな風と言われるのが恥ずかしくて、つい無愛想に呟いてしまう。表面に出ている部分とは違ってずっとケースの中に収められていた箇所はひどく白く繊細につやを秘めている。

「さわり、たいな」

おずおずと勇気を出して言ってきた相手に、あたしもまた

いつものように強がったりは出来なかった。そこまでひどい奴じゃないんだ、あたしも。

「いいよ」

二重結合の中の電子雲みたいに密やかな声で、消えそうな声で、あたしは触れるのを許した。

おずおずと芯の先を触れさせる。すうつと黒い粉が白い肌の上に残る。

「うう、やっぱり、怖いよう……」

「いいの。いっぱい痕付けて。めちやめちやにして。忘れなくして」

別れてから気づいた。

あたしたちがずっと一緒だなんて保証はどこにもないんだつて。

だからこそ、魂の奥にまで黒い粉を植え付けて欲しい。

「あなたの色に染まりたいの」

そう言って、あたしはそつと身を預けた。

鉛筆はもう何も言わなかった。ただ芯をがたがたと震わせでどうにか木と芯の間に空隙を開けないようにするので精一杯みたいだった。

やがて意を決したように芯の先が進められる。白かった表面に黒々とした炭素の粉が塗りつけられていく。芯の硬さ、その中に込められた意志の強さに高分子の鎖が一つ一つばら

けていくような、そんな気持ちになる。

込み上げてくる衝動の行き先も見いだせないままで、ただただ声をあげたくなる。悲鳴とも違う。喜びとも違う。ただ触れられていることの、こじ開けられていることの感情。自分の中に確かに愛する人を受け入れていることの感触がただただ溢れてしまつて。

きつと泣くとすれば、それはこんな時なのだろうと思つた。

翌朝、あたしは気がついた時には鉛筆の先に刺さつたままで筆箱に入れられていた。

あの小僧、どうやら汚れきつたあたしを鉛筆キャップ代わりに使うことにしたらしい。我が主人とはいえ、これはひどい。

「あう、ごめん、ごめんよう、痛い？」

鉛筆はもじもじしながらも、なんだか嬉しそうでムカつく。

「痛いわけではないしょ、この馬鹿アホドジ間抜け！ なんて止めなかったのよ！」

「だ、だってご主人さまがするから、しょうがなかったんだもん」

もごもごと言い訳をして、それからぼろつと本音を漏らした。

「い、嫌じゃない、し」

そう言われてしまうと、あたしも別に嫌じゃなかった。消しゴムとしての本質からはズレまくってるけど、とにかく一緒にいるのだから。

「鉛筆」

「ん？」

「これからも、よろしくね」

ガタゴト揺られて今日も学校。

身をすり減らしてお仕事お仕事。

それでも、好きな奴と一緒にいられるなら、

それであたしはじゅーぶん満足なのだ。